

清沢満之の研究

— 信仰・思想・実践 —

清沢満之研究の課題

神戸 和磨

「清沢満之の研究——信仰・思想・実践——」と題して二年間（一九九一―一九九二）、共同研究を行った。本研究は、明治という時代的課題の中で宗教者、思想家、教育者として生きた清沢満之の事業を総合的に確かめ、研究しようとするものである。

初年度は満之の生涯を通して、信仰、思想、実践の側面から、いくつかの課題を分類し、本研究に携わる者の全体的な共通理解を図った。その共通理解、基礎的な確かめのところから三つの側面の課題（a）信仰（b）思想（c）実践）を分担した。その主な課題は次のようである。

① 信仰

- 1 清沢満之の親鸞の探求（清沢満之の親鸞理解）、清沢満之における近代日本での新しい親鸞理解。
- 2 清沢満之における『余が三部経』の研究、清沢満之の信念の確立における『歎異抄』の研究、清沢満之の『歎異抄』の発見。
- 3 清沢満之における自己の探求（信仰主体の問題、分限の問題）。

② 思想

- 1 清沢満之における真宗学の展開（清沢満之における宗学への批判、また清沢満之は真宗に何をもちたか）。

- 2 清沢満之における近代の問題（西洋思想の受容、宗教の定義）。
- 3 清沢満之における信仰と倫理。

◎実践

- 1 教育者としての清沢満之、清沢満之における大学教育。
- 2 清沢満之における教化の問題（『精神界』の発行）、清沢満之における仏教の近代化。
- 3 浩々洞の系譜、精神主義。
- 4 清沢満之における教団改革。

その分担課題に基づいて、研究発表と討議を逐次積み重ね、二年目も同じように先の課題を継続して学んだ。

かような点から、「清沢満之の研究——信仰・思想・実践——」と題して共同研究に務めてきたが、研究は初歩的な段階に着手したばかりである。また、その課題に対する研究成果も二年間という時間的な制約があつて、決して十分果し得たとはいえない。しかし、私たちはこの共同研究の学びを通して、清沢満之の事業を再度、いくつかの視点から広範に捉え直していかなければならない課題を痛感した。

共同研究の中で一、二の課題となった点を記すことにする。それは、清沢満之の信仰主体の形成を国家、教育、また明治の仏教復興運動の課題の中で捉え直すという作業である。

(一) 明治の時代の仏教者を通しての信仰、思想形成の問題点

なぜ仏教者が仏道を推求する信仰主体の中で、国家崇拜、現人神の国家主義という類似的自己超越の一形態に埋没していったのか。その点について、満之の信仰主体の形成は歴史の中に生きる個的自己を凝視し、自己の生死を民族・国家の観念に結びつけるのでなく、個的自己の究明の中に「忠孝」、「愛国」の国家観念を超える道を尋ねている。そのことは、『清沢満之全集』第七巻の中での『雑阿含経』を通し釈尊の生涯に自己の生き方を深求していく点によつてもよ

く知られる。つまり、ひとりひとりの生き方は国によって決められるのではないという、独立者と共同の道に生きる信仰主体の形成を生涯を通して明らかにした人であるということである。その点を満之の周辺を生きた加藤弘之、井上哲次郎、高山樗牛、内村鑑三等の生き方、思想と比較しつつ、信仰の主体形成の問題を深究していかねければならない。

(二) 明治の『教育勅語』の中の満之の教育観

明治の初代文部大臣、森有礼の学校長の訓示に明示されるように、当時の教育は「生徒其人の為にするに非ずして、国家の為にする」という風潮の時である。そのような時代の中で、真宗大学の建学の精神はどのような位置を有していたのか。『教界時言』の「真宗大学の新築の位置に就いて」等を通して確かめていかねければならない。

「本学の目的は、学生をして、他力信心を獲得せしむるにあり。」

そのように当時、名乗ること自体が大変な出来事であり、勇気であったと考えられる。時代の風潮の『教育勅語』による教育方針と、真宗大学の願いを対置するとき、本学の精神が指標していた深広なる世界観がよりリアルにみえてくるのではないだろうか。その点を資料をもってより明らかにしていかなければならない。

(三) 清沢満之の真俗二諦論と当時流布した真俗二諦論の確かめ

宗門の『宗制寺法』（一八八六、明治十九年）に「二諦相依の法門」、「現当二世の相益」が位置づけられたときから、「政治と宗教」、「教団と国家」はどのように機能したのか。その点の真俗二諦論を宗門状況の具体的な事例、問題を通して資料を整理し、問題を明らかにしていかなければならない点など。

以上のように、「清沢満之の研究——信仰・思想・実践——」の課題を学ぶ中に、私たちはいくつかの広範な課題と資料収集、問題点の整理を行わなければならないことになった。その上で、現在廃刊となっている『清沢満之全集』を新たな資料と共に発行するための準備をすることにした。また随時、『親鸞教学』（すでに数点の研究成果を発表している）、さらに他の雑誌等に研究成果をまとめ発表していくことにした。